

特集：電子図書館はじめの一步

公共図書館の電子書籍サービスのすすめ

山重 壮一

1. なぜ、電子書籍サービスをすすめるのか一

私も50代半ばになって小さい字が見えず、本を読む時は、近眼鏡をはずして読んでいる。眼鏡をはずして、本を目の近くに持ってきて読むというのも、くたびれる。

少子高齢化・人口減少、また、障害のある人も増えたりするのは、文明の必然で、そのことを嘆いていたなら、文明を否定していることになる。文明の課題は文明で解決すればいい。日本はアメリカに比べて、ICTへの投資が低いことが指摘されているが、ユニバーサル・デザインやバリアフリーな環境が求められるなら、積極的にICTの活用を進めるべきだ。

私が図書館での電子書籍サービスをを進めるべきだと思うのは、このような理由による。電子書籍は、自由に文字を拡大できるというだけでも、非常に便利である。確かに、高齢者はICTが苦手かもしれない。しかし、電子書籍を読むことが、そこまで難しいだろうか。また、これから高齢者になる50代の人で、電子書籍の操作が難しいという人の方が珍しいだろう。

それから、電子書籍の読み上げ機能がすばらしい。相変わらず読み違いがあるが、技術は進歩するだろう。ある時、私は、腰を痛めてしまって、一日、寝ていた。退屈なので、電子書籍の読み上げ機能を使って、ずっと聞いていた。速さもコントロールできるから、そんなに時間もかからない。本を聴くのも、こんなに便利だとは思わなかった。

また、電子書籍は、頭をまっすぐにして読める。頭を下にしないで読むというのは、非常に楽だ。

2. 高知県が「高知県電子図書館」を始めた理由

高知県は電子書籍サービスTRC-DLを「高知県電子図書館」として2017年10月18日から始めた。2018年7月24日開館の高知県・高知市共同運営・合築のオーテピア高知図書館の準備で、県立図書館が2018年1月から7月まで休館するため、少しでもサービスを提供しようということだ。しかし、それよりもっと一般的な理由として、障害のある方、図書館未整備地域の方でも使えることがあった。中山間地域の高齢者は電子書籍を利用しないかもしれない、コスト・パフォーマンスは悪いかもしれない。しかし、先行投資するとしたら、今でなければ間に合わない。また、インターネットが普及した現代、都会に住まなくても、一次産業以外の仕事もできるのだ。ただし、インターネットの情報だけでは、あまりに情報過疎だ。リアルな図書館が充実していればいいが、すぐにはできない。すると、移動図書館をまわしたり、公民館図書室等に本を送るとともに、電子書籍を県内全域で提供することも、図書館サービスの基本的な考え方である「全域サービス」の一つである。

なお、オーテピア高知図書館は誰でも登録できるが、高知県電子図書館の登録は、高知県在住・在学・在勤に限り、カードもリアルな図書館の利用カードとは別にしてある。電子書籍サービスのカードは、免許証・保険証等の住所を証明できるもののコピーを郵送すれば発行する。中山間地域に住んでいても、リアルな図書館まで出向く必要はない。